

---

# その後の眠れる森

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その後の眠れる森

### 【Nコード】

N3805D

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

「私版眠れる森の美女」の完全な続編です。

## 第1章 申し出（前書き）

おまけ

～その後のおはなし～

「眠れる森の忘れられた物語」プロローグ

というのが正式タイトル。

「眠れる森の忘れられた物語」については最後に。

## 第1章 申し出

イバラの森が白薔薇の森になったその後のおはなし。

眠りから覚めたオーロラ姫はシルバー王子と改めて正式に婚約し、二人の結婚式の準備でロヴィーク国は久しぶりに活気が溢れ、人々に明るい笑顔が戻りました。

結婚式までにいろいろ解決しなければならぬ問題がありました。まずはこの度の事件の大罪人、黒魔女カラベラスの処罰です。

しかしこれはオーロラ姫がいかなる罰も断固反対しました。オーロラ姫にとつてはあくまでも大事なお友達でしたし、娘のクラリスとはすっかり仲良くなつて妹のように可愛がっていましたからクラリスのためにも愛する母親を罰するなど絶対に許しませんでした。それに、なにしろオーロラ姫は十年間ただ眠っていただけでしたから。

何か長い夢を見ていたような気もしましたが、一度目覚めてしまつては夢はもはやただの夢でしかなく、すぐにすっかり忘れてしまいました。

周りの者たちはたまつたものではありませんでしたが。

なるほど、その間のことを知つてみればオーロラ姫も人々の怒りももつともだとうなずけるのですが、それでもやっぱりあのディナを悪く思う気にはどうしてもなれないのでした。

そんなオーロラ姫の気持ちはともかく、それでは実際にあの黒魔女にどんな罰が与えられるかとなると、それはそれでまた頭の痛い問題でした。

罪人は捕らえて牢屋に閉じこめるのがまずふつうの罰ですが、あのカラベラスを捕らえたり、牢屋に閉じこめておくなんてことができるでしょうか？

死刑という最も重い罰がありますが、それを果たすまでにまたどれだけの被害を被ることになるか、王様はもう考えるのもうんざり

してしまいました。

さいわいカラベラスは自分で牢屋を作って自分で閉じこもってしまつたようなものですから、それを以て処罰とすることで形を付けることになりました。

ずいぶん広くて快適な牢屋ではありませんが。

もちろんこのいい加減な処分に不満を持つ者もたくさんいました。その先頭に立つのが王妃様でした。

黒魔女カラベラスに一番激しい憎しみを抱いていたのが王妃様であつたでしょう。

愛しい一人娘を最も光り輝く時期に奪い去られ、その苦悩の十年間、王妃様は人並み以上に老いを深めていました。

せつかくオーロラ姫が帰ってきたというのに最初のうち自分の容貌の衰えを恥じて会うのを拒んでいたほどです。

王妃様は何がなんでも決定的な罰をカラベラスに与えなければとつてい気が済みませんでした。

このままではまた何か恐ろしい悲劇が起きそうで、リラの精は気が進まないまでも白薔薇の森へカラベラスに会いに行きました。

「妖精の女王様が許可を下されたら」

とカラベラスは言いました。

「王妃様のこの十年間を無かつたものにする事ができるわ」

「そんなことができるの？」

力の強い妖精の女王様でもまさかそんなことができるとは思えませんでした。

「女王様ではなく、時の精を目覚めさせるのです」

「時の精？」

リラの精は自分たちの仲間になんな妖精がいることを知りませんでした。

「あなたが知らないのも当然ね。彼女のことは女王様を始め一部の力のある長老たちしか知らないはずだから」

リラの精は面白くありません。

「あなたがなぜそんなことを知っているのよ？」

カラベラスは意地悪く微笑むだけで教えてくれません。

「私が頼んでいたと言えば女王様も彼女を目覚めさせてくれると思うわ」

「だから、なんであなたがそんなに偉いのよ？」

「ただ問題は、」

カラベラスはリラの精の問いを無視して話を進めました。

「時の精を妖精の国の外へ出すわけにはいかないから、王妃様を妖精の国に連れていく必要があるわ。こっちの方が難しいわね」

それはそうです。妖精の国に人間が入るなど不可能です。

「ベラたち鏡姉妹が力を合わせれば可能でしょう」

カラベラスがクスクス笑ったのでリラの精はじろりと睨み付けてやりました。あの姉妹が大の不仲であるのは妖精の国で知らない者はありません。

「そう、私から一つ王室に返上するものがあつたわ。クラリスを呼んでちょうだい。話はそれからね」

というわけでリラの精はお城に帰ってクラリスを連れてくることになりました。まったく腹が立つたらありません。

今のお城は以前の場所、つまり今の白薔薇の森からずいぶん離れたカンパニアの王宮が当てられています。クラリスはそこでオーロラ姫に保護されて共に生活していました。

クラリスは夢の世界のトンネルをくぐればいつでもお母さんお父さんに会いに行けましたが、やっぱり体ごと会いに行つてうんと甘えたいと思っていました。

「ヴァイオレットに乗ってくればいいそうよ」

と、リラの精は伝言してあげました。

美しいピンクの竜ヴァイオレットはクラリスがテレパシーで呼ぶと岩山の谷底から大喜びで飛んできました。

突然現れた巨大な竜に街の人たちはびっくりして恐れおののきま

したのでクラリスは急いで飛び乗って飛び去ろうとしました。

そこへオーロラ姫が駆けつけて呼びかけました。

「ディナに会いに行くの？ だったら私も連れてって！」

ここでオーロラ姫を連れていったら誘拐されたと疑われてまた大騒ぎになってしまいます。

「ねえ、お願いだから」

オーロラ姫は無邪気に目をキラキラさせて竜に乗ってみたくて仕方がないといった有様です。

案の定、王様と王妃様が大勢の兵士を連れてバルコニーにやってきて、オーロラ姫は部屋の奥へ引き戻されてしまいました。

「クラリス、あなたもこつちへ降りていらっしやい！」

王妃様はヒステリックに喚き、兵士たちはギラギラ輝く槍を構えてヴァイオレットを狙っています。

「ああ、もうめんどくさいな」

クラリスといっしょにお城に居着いているベラが出てきて言いました。

「おい、リラ。問題の人を連れてつちまえばいいじゃないか？」

リラの精もそれもそうかと思って王妃様を背後から抱きかかえる  
と、よいしょとヴァイオレットの背に連れ去りました。王妃様がキ  
ャーキヤー悲鳴を上げたのはもちろんです。

「ずるいわ、私も連れて行ってよお！」

オーロラ姫が手を差し伸べましたが、

「あなたはおとなしくお留守番してなさい」

とリラの精はヴァイオレットを促し、お城を飛び去りました。

「じゃあねー」

と、ベラも後に続きました。

キヤーキヤー悲鳴を上げていた王妃様もやがてぐったり放心状態  
になり、しばらくすると上空から眺める美しい景色に次第に心を動  
かされ、すっかり空の旅を楽しむようになります。

ヴァイオレットが白薔薇の森の上空に到着し、さてどこに降りようかと旋回していると、突然、ヴァイオレットの体から強烈な光が発し、体がグンと縮んだかと思うと、ヴァイオレットは真っ白なペガサスに変身しました。

光の中からピヨーンと弾き出されたものがあります。

ベラがひつつかむと、真っ赤な、それはどうやら妖精の子どものようでした。

「誰だ、おまえ？」

妖精の子どもは何が起こったのか分からないらしくキョロキョロしていましたが、ワーツと叫んで暴れ出しました。

「なんだよ、どうしてだよ、竜じゃなくなっちゃったじゃないか、カラベラスのバカヤロー！」

ベラは大喜びで笑いました。

「あいつをバカヤロー呼ばわりするとはなかなかたいした度胸じゃないか。で、本当のところ、おまえ何者なんだい？」

「放せよ、幽霊。あたしはねえ、火の精なんだぞ！ 強いんだぞ、怖いんだぞー！」

自称火の精は精一杯すごんでベラを睨み付けましたが、ベラに鼻先をピンと指で弾かれてワーワー泣き出しました。

「ちよつと何やってるのよ」

ペガサスがおとなしいのでクラリスに任せてリラの精がベラから妖精の子どもを奪い去りました。

「ちよつと火の精には見えないわねえ」

妖精の子どもはぐすんぐすん鼻を鳴らしながらふてくされて言いました。

「そうだよ、あたしは火の精じゃない、火花の精さ。火を出したって」

と、火花の精はリラの精の鼻先に指を突き立ててパチンと火花を散らしましたが、ちつとも熱くありませんでした。

「仲間の火の一族からはバカにされてさ、家出して人間の世界にや

つてきたら悪い魔法使いに騙されて宝石にされてあっちこっちに売られて歩いてさ、いかさまバクチでカラベラスがバカな貴族から取り上げて、元の妖精に戻してくれたんだけれどさ、今度はあいつにランプ代わりにこき使われて、文句を言ったらじゃあ出て行けってあたし、人間も怖いし、妖精の国に帰ったら女王様に怒られるだろうし、また仲間からバカにされるだろうし、それであいつに頼んだよ、強くしてくれって。そうしたらあいつとくつつけて竜にしてくれたんだ」

火花の精は竜の自分を思い浮かべてうっとりしました。

「ね、竜のあたしは強かったよねー、かっこよかったよねえー」

火花の精はどうやら竜の自分がとても気に入っていたようです。

「それじゃああのペガサスはなんなの？ 本物のペガサスなんて見たことないわ」

ついでながらヴァイオレット以外に本物の竜も見たことありませんでした。

「あいつは元々はただの馬さ。狩り場で岩に足を挟んで骨を折ってしまったんだ。持ち主のバカ貴族が殺そうとしたのをカラベラスが助けて翼を生やしてやったのさ」

カラベラスは知らないところでけっこう良いことをしていたようですが、それはきつとあの馬が真っ白な美しい毛並みをしていたからだろうとリラの精は納得しました。

クラリスと王妃様を乗せたペガサスは白薔薇の森の中心にそびえる大樹の麓に降り立ちました。

カラベラスは夫のアイリスと揃って最敬礼をもって王妃様を出迎えました。

王妃様は生まれて初めての空の旅に足がおぼつきませんでした。クラリスに支えられて何とか威厳を保ちました。

リラの精とベラ、それに火花の精が降りてくるとカラベラスは言いました。

「さて、お話を始める前に失礼して」

カラベラスは火花の精に言い放ちました。

「これまで岩山の門番ご苦労様。でももう必要ないからおまえはクビよ。どこへなりと行くがいいわ」

「そんな」

火花の精の抗議を無視してカラベラスは娘に優しく言いました。

「その馬はあなたが世話してあげなさい。竜より素敵でしょう？」

ペガサスは新しい主人に甘えるように顔をすり寄せ、クラリスはくすぐったそうに鼻の頭を撫でてあげました。

「そういっわけですので王妃様」

話を向けられて王妃様はビクリと体を震わせました。こうして向き合うとやはりこの女が恐ろしくて仕方ないのです。

「私がこれまでおりました岩山を王家に、内部の城をオーロラ姫に差し上げます。あの城はもともとオーロラ姫が相続するべき物を故あつて私がちようだいしたものですから」

王妃様は岩山と岩山のお城などもらつてなんになるのだろうと思いましたが、岩山は実は丸ごと巨大なエメラルドの原石であり、中のお城は華麗な宮殿なのでした。

「そこで一つお願いなのですが、そうなりますと娘クラリスの家がなくなつてしまいます。ここに住まわせても構わないのですが、できましたら今のままお城に住まわせてあげてもらえませんか？ この子は母親の私が言うのもなんですが素晴らしい才能を持った小さな魔女です。不心得者の私の代わりにいづれ皆様のお役に立つときがありますように」

「いいでしょう。決して間違つた道に進まないように責任を持つてお預かりしましょう」

王妃様は精一杯の皮肉を込めて言ってやりました。

「いいわね、クラリス？ 会いたくなれば、いつでも会えるものね」  
母親の暖かい眼差しを受けてクラリスは嬉しそうにうんとうなずきました。

「王妃様、この度の私の行為に置きましては王妃様にこれ以上ない苦痛を強いたことを心よりお詫びいたします。そこで提案なのでございますけれど」

カラベラスは鋭い魔女の目でじつと王妃様を見つめました。

「この十年間をすべてなかったことにしていただけかもしれませんでしょうか？」

「すべてなかったことに？」

「そう、すべて、です」

王妃様には魔女の言うことが理解できませんでした。

「妖精の国に時の精という者がおります。その者の力を借りれば、王妃様の時を十年前に戻すことができます。王妃様はオーロラ姫の十七歳の誕生日の朝に戻ってそれ以降の時間をすべて失うことになります。時を失った王妃様はいきなり十年後のこの世界に放り込まれてびっくりなされることでしょう」

「いかがですか？」と訊かれて王妃様は理解が及ぶに世界がすべて輝きを増していくように思えました。

この悪夢の十年間をすべて無かったものにして再びオーロラ姫と共に人生をやり直せるのです。

「ええ、ええ、ええ、もちろんよ、ああ、夢のようだわ！」

カラベラスは満足そうにうなずいて話を続けました。

「この十年の時間も王妃様との関わりを失って多少の影響を受けるでしょう。本当ならば国王様も同様に若返らせてさしあげるべきなのですが、国王様では時間の受ける影響が大きすぎます。それに」と、リラの精を見て、

「妖精の女王は国王のリラの精になさった行為を決して許さないでしょう」

「ええ、まあ、そうかもしれないわねえ」

王妃様はもう自分のことで胸がいっぱいで、王様のことなどどうでもいいようでした。

「国王様には死して後十年間その肉体を保存し、この世界に意識を

とどめられるようにいたしましょう」

「生きた屍だね」

ベラはお化けの格好をして悪趣味に笑いました。

「笑っていいのかしら？」

カラベラスに話を向けられてなんだよう？と睨みました。

カラベラスはベラを通り越してリラの精に話しかけました。

「これから先はあなたに任せるわ。

妖精の国の鏡の泉と私の岩山の城の大鏡。

これだけ言えば分かるわね？」

「ハイハイ先生、分かりました」

リラの精はベラ、写し鏡の精、正確には写し鏡の精の幽霊に言いました。

「こつちの世界の鏡と妖精の国の鏡をつなげて人間の通れる道を作るの。そのためにこつちの世界のあなたと妖精の国のあなたのお姉さん、鏡の精の協力が必要なの」

「なんだよ、そういう話なのかよ？」

案の定ベラはぶいとへそを曲げてしまいました。

「だあれがあんな高慢ちきないけすかない奴と仲良く協力なんてできるかい！」

リラの精はハアと大きくため息をつき、目でクラリスに助けを求めました。

「ねえ、お願いベラ、王妃様のために力を貸して」

クラリスは可愛い女の子の魅力を最大限視線に込めてベラに訴えました。

「うるさいねえ、いくらあんたの頼みでも・・・」

クラリスといっしょに王妃様にまで胸の前で手を合わせて瞳で訴えられてさすがにベラもたじたじとなりました。

「えーい、うるさいうるさい！ 駄目なものはダメ！」

頑固なベラにリラの精もつい嫌みが口について出ました。

「寛容なお姉さんは喜んで力を貸してくれると思うけどなあ・・・」

そうね、確かにあの人なら大いばりで自分の力を自慢するでしょうねえ。それともなあに？ あなたにはそんな大技、無理なのかしら？」

「うるっさいなあ！」

ベラは意固地になつてそっぽを向いてしまいました。

リラの精ははつと気づいて心を痛めました。

ベラは本当に出来ないのかもしれないかもしれません。

ベラは妖精としては一度死んでしまっているのです。

「クラリス」

カラベラスがクラリスに呼びかけました。

「城の広間の大鏡は分かるわね？ あなたが皆さんに案内しておあげなさい」

ベラはカラベラスを見ました。

勘のいい二人にはそれで十分でした。

リラの精も分かりました。

その鏡でなら可能なのです。

「わかったよ、やりやあいんだろ、やりやあ？」

と、話はまとまつて皆はいったんカンパニアのお城に帰ることにしました。王妃様は早く妖精の国に行きたくて仕方ないのですが、このままではまた王様が何を考えるか分かったものではありません。見送りながら、カラベラスはベラに呼びかけました。

「ベラ。あなたを巻き込んだのは悪かったと思ってるわ。でも、ありがとう」

ベラは肩越しにじいっとカラベラスを見て、ふんと鼻を鳴らしました。

「何を今さら言いやがる。あたしの力が必要だったんだらう、あのカラベラス様がさ？」

ベラはニヤツと笑って、そして二人は別れました。

お城に帰ると、オーロラ姫がぶんぶん怒っていました。

竜がペガサスになってしまったと知ってます怒り、妖精の国に行けると大はしゃぎの王妃様がますますその怒りに油を注ぎました。

王妃様の話を聞いて王様もすっかり落ち込んでしまいました。

「おまえは十歳若返り、わしは生きる屍か？」

王様もベラと同じ発想をして深いため息をつきました。

でも心の中では王妃様がすっかり元気を取り戻したことを嬉しく思っていました。

「するとおまえはいきなり十歳年老いたわしに会うことになるのだろうか？ 老いぼれたわしに嫌気がさしはしないだろうか？」

「大丈夫ですよ、今のあなたも十年前に負けないくらい素敵ですよ。ちよつと、貫禄が付きすぎていますけれど」

久しぶりに王妃様にキスされて、王様はちよつと照れて、ちよつと物悲しい気分になりました。

## 第2章 緑のお城

岩山のお城へ向かう一行は予定を大きく上回る豪華なパレードになつてしまいました。

まずオーロラ姫が自分も行くと言って聞かず、王様もクラリスから岩山がエメラルドの固まりと聞いてぜひ視察に行かねばと勇み立ち、たまたまやってきたシルバー王子まで同行することになり、大勢のお供の者たちが付くことになりました。

ちなみにシルバー王子はオーロラ姫との結婚後ロヴィーク国にお婿さんに来ることが決まっていました。幸い王子には優秀な弟さんがいて、この十年間の間にルービツシュ国の後継者として立派に成長していました。はつきり言ってしまうえば、王子は今さらもう邪魔な過去の人でした。

王様王妃様オーロラ姫シルバー王子と、みんな旅に出ってしまったお城は空っぽになつてしまいましたそうですが、この国の優秀な摂政でありカンパニア市の女王であるララベル王女がいるので困ることはありません。

ちなみにこのララベル王女の守護精霊が例の鏡の精であり、リラの精は王女の持つ銀の手鏡を通して鏡の精と打ち合わせをしました。ベラも一度だけ顔を見せましたが、すぐにお互い悪口の応酬をしながら、打ち合わせにも何もなかったものではないのでリラの精に追いやられました。

リラの精は一度妖精の国に帰って女王様にこの件についての許しをもらわなければと思っていましたが、どこでどう情報が伝わったものか、女王様はすべてご承知で

「よろしい。許します」

とのことを鏡の精から教えられました。

カンパニアの人々に盛大に見送られて一行は黒い森の岩山目指し

て旅立ちました。

何事もなく楽しい旅行を過ごし、岩山の内部に入った王様たちはエメラルドの輝きの凄さと宮殿の豪華さに圧倒されてしばしあんぐりと口を開けて立ち尽くしてしまいました。

エメラルドに夢中の王様は放っておいて、クラリスはみんなを城の中へ案内しました。

入口を入ると広いホールになります。

その奥へは左右の通路があり、左右から上れる二階への回り階段がありました。ですから中央は壁になっっているのですが、その上部に一枚の大きな絵が飾ってあり、その下にカラベラスの言っていた大きな姿見の鏡がありました。

先頭を並んで鏡に向かって歩いていったオーロラ姫とリラの精は上の絵を見て揃って「あら」と声を上げました。

自分たちと同じように二人の女性が並んで立ち、いかにも仲良さそうに微笑んでいます。

まるで生きてそこにいるような、実に見事な絵でした。

二人の女性はとてもよく似ていましたが、その一人は、明らかにカラベラスでした。

それも、なんと清らかで、若さに輝いた、幸せそうな姿でしょう。「クラリス、この絵は？」

オーロラ姫に訊かれてクラリスは首を振りしました。

「よくは知らないの。お母さん、あんまり話したくないみたいだから。でもね、お母さんのすごく大切な人なんですって」

クラリスも絵を見上げてこの絵を見つめる母親の横顔を思い起こしました。

とても嬉しそうであったり、楽しそうであったり、懐かしそうであったり、悲しそうであったり・・・

リラの精は端に記された画家のサインを見つけました。

その絵は、オリジナルのアイリスが描いたものでした。

ようやく王様がやってきて、皆は鏡の前に集まりました。

「それではあなた、行って来ます」

「おお。どうか戻ってきてもらしのことを嫌いにならないでくださいよ」

王様王妃様は抱き合って別れの挨拶をしました。

「それじゃあ行って来るわね」

リラの精がオーロラ姫、シルバー王子、クラリスに言いました。

「妖精の国はちょっと時間の流れが違うから帰ってくるのは一時間後になるか一週間後になるか一ヶ月後になるか分からないけれど、まあ、気楽に待っていて」

リラの精とオーロラ姫も抱き合って別れの挨拶をしました。親愛に溢れながら、ちよつと散歩に行ってくるようなそんな気楽な挨拶でした。

クラリスはふとベラを見ました。

その表情がふと硬くなりました。

「ベラも行くの？　すぐに帰って来るんでしょう？」

ベラはにっこり笑うとクラリスをぎゅうつと抱きしめました。

幽霊なのであまり感触はありませんが。

「幽霊ってというのはこの世に執着があるから居座っているのさ。執着がなくなってしまうたらこの世にはいられなくなっちゃう。あたしはね、今すぐごく幸せなのさ。だからね、もう長くはいられないのさ。向こうに行ったら、たぶん、もう戻ってこない」

「嫌だよ！」

クラリスはいっしょうけんめいベラのつかめない体をつかもうとしました。

「友達じゃない、あたしはベラと別れたくない！　ベラは私と別れても平気なの？　別れたくないって、いっしょにいたいって、この世の執着にならないの？」

「幸せはね、春のまどろみのようにふわふわ溶けていくものなのさ。

ああ、幸せだなあって暖かい心がゆったり広がって行って、いつの間にか自分が無くなっちまう。そういうものなのさ」

クラリスは急にベラの影が薄くなったように感じられて切ない悲しさが胸いっぱい溢れてきました。

ベラの目からもぼろぼろ涙がこぼれ落ちていました。

「いつかまたきつと会えるさ。どんな風にだか分からないけれど、お互いそうとは気づかなくても、きつとね」

クラリスがぎゅゅとベラを抱きしめると二人の体は一つに重なって、クラリスはベラの心がしっかり自分に刻み込まれるのを感じました。

「だいじょうぶさ、あたしの代わりにこいつがいる」

ベラは火花の精の鼻先をピンと弾くまねをしました。

火花の精はカラベラスのところにとどまるか、クラリスについていこうか、さんざん迷って結局クラリスにくっついてきていたのでした。

火花の精も目をうるうるさせてビー玉のような大粒の涙をぶら下げていました。

「さて、そろそろ行こうかね」

ベラはにっこりクラリスに笑って大鏡に向かいました。

「おい、バカ姉！。準備はできてるんだらうねー」

大鏡が銀色に濁ったかと思うと大きく波立って鏡いっぱい巨大な顔の形が浮かび上がりました。

「やかましい、バカ幽霊妹！ こっちは人間を受け入れるんでたいへんなのよ！ 長老たちを集めて空間の調整にずいぶん苦労したんだからね！」

と、銀の巨大な顔は皆を見渡してさつと愛想のいい顔になると言いました。

「準備は整っておりますのよ。オホホホホ。さあ、王妃様、我が妖精の国にどうぞおいでくださいませ」

顔が引っ込むと銀色は七色に複雑に輝き出しました。

妖精の国につながる道が開かれたのです。

いざとなると王妃様におつかなびっくり躊躇が生じました。

「だいじょうぶですわ、王妃様。さ、まいりましょう」

リラの精に手を取られ、王妃様は何か言いたそうに口をパクパクさせながら七色の光の中に消えていきました。

「それじゃあね、さよなら、クラリス」

ベラも光の中に入っていかうとしました。

「待ってよ、ベラが行っちゃったら王妃様が戻ってこれないんじゃない？ ねえ！」

ベラはニヤリと笑いました。

「あんたの母親はあたし以上の大嘘つきさ。本当はね、あたしはいらなかったのさ」

「ベラ！」

ほとんど光の中に入り込んだベラは、クラリスの呼びかけに片手をにゅつと突き出してバイバイと振りしました。

鏡は光るのをやめ、妖精の国への道は閉じられました。

クラリスは一時間二時間と鏡の前で膝を抱えて何か起こるのを待っていました、何も起こりませんでした。

クラリスは立ち上がり、心配そうに後ろでずーつと見守っていたオーロラ姫と火花の精を振り返るとニコツと笑いました。

「行こうか。妖精なんて気まぐれ者、ゼーんぜん当てにならないものね」

オーロラ姫は手を伸ばしてクラリスの手を握りました。

二人はゆっくり歩きながら話しました。

「ねえ、このお城、本当に私がもらったいいのかしら？」

「お母さんがそう言っていたのだから、いいのだわ」

「でもねえ、一つ困ることがあるのよ。お父様はきつと周りのエメルルドをゼーんぶ黄金に替えるつもりでいるわ。そうなると何十年も鉱夫たちが通い詰めることになるわ。それじゃあとても落ち着いてお城でゆっくり出来ないわ。なんだってこんな不便なところにこんな立

派なお城を建てたのかしら？」

「このお城はどこか別のところに建っていたものをお母さんがこへ運んできたのよ。どこからかは教えてくれなかったけれど」

「本当？ こんな大きな物を？ どうやって？」

「布に包んで背負ってきたんですって」

オーロラ姫はアハハまさかあと笑いましたが、クラリスは案外本当なのではないかと思いました。

「あーあ、どこかもつと景色のいい便利なところに運べればいいのにな」

クラリスは今自分が使える魔法でそれが可能だろうかと考えました。

「もし運べるのだとしたらどこがいい？」

「そうねえ、やっぱりカンパニアと白薔薇の森の中間くらいがいいわ」

「どこがいいかしら？」

クラリスは火花の精に訊きましたが、

「ああ、そうだね、ヴァイオレットの名前はあなたとお馬さんどつちが引き継ぐのかしら？」

「あたしに決まってるよ！ あいつは元々ただの『白』だったんだから」

というわけで火花の精の名前はヴァイオレットになり、白は、白はちょっとかつこわるいので空飛ぶ馬ということで『白雲』と名付けることにしました。

「お城を運ぶんならちようどいい丘があるじゃないか。近くに川も通っているし、あそこがいいよ」

ヴァイオレットとクラリスは上空からの景色を思い浮かべて、たしかにあそこならいいだろうと思いました。

「やってみようかしら・・・」

ぼつりとつぶやくように言つと、なんとなく出来るような気がしてきました。

クラリスの頭はフル回転し、魔女の瞳が爛々と輝いてきました。

翌日、クラリスは皆をホールに集めると宣言しました。

「このお城を引っ越しさせます」

王様は当然中の家財道具を持ってどこか別の屋敷へ引っ越すつもりなのだろうと思いました。

「いいえ、このお城を丸ごとここから運び出します」

みんなびっくりしてそりゃあ無理だ、不可能に決まっていると言いました。

「このお城全体を小さなブロックに切り分けて運び出し、新しい場所を組み立てます」

それを聞いた誰もががっかりしました。

オーロラ姫がためらいがちに尋ねました。

「ねえクラリス。小さなブロックとは言っても大きな壁や柱や土台の石がたくさんあるのよ。まさかそんな物までみんな小さく切り分けたら、例え元通り組立てなおしても、ガタガタになってしまうんじゃないかしら？」

クラリスは顎に指を当てて自分の考えを確かめて、

「たぶん、だいじょうぶ」

と、請け負いました。

このお城の今の持ち主はオーロラ姫です。引っ越しを実施するかもしれないかは彼女の決断にかかっています。

誰もが止した方がいいという顔をしてオーロラ姫を見つめました。

「いいわ。やりましょう」

クラリスは元気にうんとうなずきました。

「一つだけお願い。大鏡とあの絵だけは外して大事に運んでくださいませんかしら？ あれだけは、傷つけない自信がないの」

というわけで、シルバー王子の指揮で男たちによってホールの大鏡と二人のお姫様の絵が取り外されました。どちらもしっかりした額に納まっていたので大した作業ではありませんでした。鏡と

絵は大事に布を被され、王子が責任を持って運ぶと約束してくれました。

皆はお城の外に出ました。

クラリスは両手を開いてお城に向けると、力を込めてお城に今の自分の姿をしつかり覚えるように魔法をかけました。相手が建物であつても時を経れば個性が生まれます。現に妖精の国にはお城の精という者がいるとベラに教えられていました。クラリスはベラの特訓で相手に強いイメージを与える術をよく身につけていましたから、この魔法にはちよつと自信がありました。

次にクラリスはポケットから一匹のクモをつまみ出すと、ヴァイオレットに持たせてお城の向こうへ行かせました。

クモのお尻からは目に見えない細い細い糸が吐き出されていて、クラリスの手と結ばれてふわふわ漂っています。

クラリスが魔力を込めると蜘蛛の糸は銀色に光り出し、ピーンとまっすぐ張つて、ふつうではあり得ない目に見えないほど細い細い棒になりました。

クラリスが指を振ると、その指揮に合わせて銀色の棒はお城の上に飛び上がると、ストーン、ストーン、ストーン、と、まるで包丁でキャベツの千切りをするように細かくお城へ振り下ろされていきました。観客たちは銀色の輝きを追って忙しく目と顔を動かしました。

銀色の棒はそうして端まで行ってしまうと、直角に向きを変えて奥から手前に同じくストーンストーンと振り下ろされていき、手前まで来てしまうと、今度は横向きに、同じように、スイ、スイ、スイ、スイ、と上から下へと走っていきました。

そうしてさらに向きを変えてスイスイスイと。

クラリスはふーと息をついて言いました。

「はい、おしまい」

お城はまったくくなんの変化もなく、そのままの姿で立っています。オーロラ姫がおずおずと尋ねました。

「何も変わらないようだけど？」

クラリスは落ち着いてにっこり笑いました。

「変わりがあったら大変だわ」

そうして入口の階段をとことこ上がってドアの取っ手を引くと、スポット、真四角の切り口を残して取っ手が真四角のドアの板をくっつけて抜き取られました。

なんと驚いたことにお城はすべて手の上にひょいと乗るくらいのブロックにきれいに切り分けられているのです。

取っ手を元に戻すと、切り口にピタリと収まり、ドアは少しも形が崩れたりはしませんでした。

「驚いたわ。でもあんなに小さく切る必要があるの？ 運ぶのも組み立てるのもかえって面倒だと思っけれど？」

「小さくしなくちゃ私に運べないもの」

クラリスは皆を岩山の外へ出し、岩橋を渡った対岸まで下がらせました。

シルバー王子とヴァイオレットだけクラリスのお手並みを拝見するために中に残りました。

「さて、上手く出来るかしら？」

クラリスは風を起こし、ぐるぐるお城の周りを巡らせました。風はどんどん強くなり、ヴァイオレットは吹き飛ばされそうになって慌てて王子の胸の合わせに潜り込みました。

風はついに竜巻となるとお城のブロックを次々巻き上げ、天井の吹き抜けから空へ舞い上がっていききました。

最後のブロックが舞い上がると、

「あたし、見てくる」

ヴァイオレットが飛び出し、竜巻に乗ってピューーンと飛んでいってしまいました。

外に出ていた人々は岩山の上から吹き出したブロックをもう呆れ返りながら眺めていました。

ブロックはグルグル竜巻に巻かれながらはるか北の方へ飛んでいってしまいました。

クラリスが出てくるとオーロラ姫はクラリスの手を握って振り回さんばかりにしてもう興奮の絶頂の有様でした。

「すごい、すごい、すごいわあ！ ねえねえ、これからどうなっちゃうの？」

「見に行く？」

クラリスとオーロラ姫はペガサス白雲にまたがって皆より一足先に結果を確かめに行きました。

空の旅にオーロラ姫は大はしゃぎです。

二人よりさらに一足早く結果を見極めたヴァイオレットはやってきたクラリスを振り返って言いました。

「すごいよ、クラリス。あんた絶対カラベラス以上の魔女になるよ」  
竜巻に乗ってきたヴァイオレットの見た光景はこうです。

飛んできたブロックは目的地の上空にグルグル渦を巻くと、下方のブロックから整然と地面に下りていき、一つも間違えることなく正確に組み上がっていきました。

そうして今、オーロラ姫の目の前に、広い空を背にさんと太陽の光を浴びて誇らしげに美しい宮殿がそびえています。

ブロック同士はぴったりくっついて、もはや完全に元通り一体化しています。

オーロラ姫はクラリスに向かい合って改めて言いました。

「私もう一生あなたを放さない。ここが私たちの新しいお家よ」

ああ、早く王子たちやってこないかしら？ 早くみんなの驚く顔が見たいわ。

オーロラ姫は大空に向かって気持ちよさそうに笑いました。

たまたま通りかかった農家の家族がおそろおそろ丘を登ってきました。

それに気づいたオーロラ姫は手を翻して深々とお辞儀し、満面の笑顔で言いました。

「よろしく皆さん。これからここに新しい街ができますのよ」

呆気にとられる農夫たちの背後にはまだ何も無い野原が広々と広

が  
っ  
て  
い  
ま  
し  
た  
。

**第2章 緑のお城（後書き）**

後半2章は明日。

2008.1.5

### 第3章 時の精

リラの精に手を引かれ、王妃様は小さな池の上に浮かび上がりました。

「まあ……」

王妃様は見上げる妖精の国のそのあまりの美しさにすっかり思考が止まってしまいました。

妖精の国は桃色の柔らかい光に溢れていました。

池の周りを四本の巨木が囲み、巨木は天高く、果てしなくそびえ立っていました。

その巨木を支えに螺旋状に地面が上に巡っていました。

その螺旋の地面に幹の太い枝のたくさん生えた木が森のように繁つていて、どうやらそこが妖精たちの家になっているようでした。

赤や青や黄や緑の光たちが踊っています。

「ようこそ王妃様！」

陽気な声が呼びかけられ、王妃様ははっと我に返って声の方を見ました。

銀色に輝く美しい妖精が水の上を渡ってきます。

鏡の精です。

「いかがです、我が妖精の国は？」

「とても美しいです。もつと小さな、こぢんまりしたものだと思っています」

別にあんたの国じゃないだろうが、とベラがうそぶいて仲の最悪に悪い姉妹が睨みあっている間に別の妖精がやってきました。

ちよつと人間離れた、いかにも妖精的な顔つきの立派な妖精です。

「見た目ほど大きな国ではありませんのよ。この国にはふつつう人間は入れませんので王妃様には魔法をかけて小さくなってもらいます」

なるほど、リラの精やベラを見慣れているので当たり前に思っていました。今こうして自分とほぼ同じ大きさでいる妖精たちは、本来は手のひらに立てるほどの大きさなのです。

「ご心配には及びませんわ。元の世界に戻れば元の大きさに戻りますから。さあ、それでは我らの女王の元へ案内いたしましょう」

妖精の長老に促され歩き出すと、他にも四人の立派な妖精がやってきて列に加わりました。どうやら彼ら五人が妖精の中でも最も力のある長老たちであるようです。

王妃様はいつもお城でいばっているだけに、ちょっと心細くなつてしまいました。

あちこちから色とりどりの妖精たちが集まってきたて周りをパタパタ飛び回り、口々に興奮気味におしゃべりしました。

「あら、本当に人間だわ」

「へー、こんな小さな人間はじめて見たわ」

「王妃様なんですって。かわいいわね」

鏡の精はえっへんといばって群れ集まる妖精たちを交通整理しました。もちろんベラは面白くなさそうにフンとそっぽを向きましました。妖精たちの中には「リラ、お帰りなさい」と声をかけるものがいて、リラの精も嬉しそうに手を振って挨拶していましたが、「ベラ、カラベラスと対決したんですって？ 後で冒険の話をしてくださいね」とベラまで声をかけられて、ちよっと面食らっていました。

「何よ、どうせ負けたんじゃない。幽霊になつちやつたくせにいい気になるんじゃないわよ」

と鏡の精が言うと、

「キヤー、幽霊なんだって。こわーい」

と、ちつとも怖そうでない歓声が上がったので鏡の精はますます面白くなりました。

王妃様は女王のおわすところは当然この国の最上階であろうと思いましたが、螺旋の地面とは別の、やたらと樹木の生い茂る、むし

る地下へ向かってトンネルを下っていきました。

だんだんと明るさが失われていき、だいぶ歩いてからようやく緑色が静かに輝くそこそこ広い空間に出ました。

妖精の女王様が、たぶん羽根なのでしょう、長い長いマントを広げて椅子に腰掛けていました。

とても静かでないながら恐ろしく威厳に満ちた顔姿でした。

王妃様はもとより、リラの精、鏡の精、長老たち、あのベラまでもが緊張の面もちでかしまりました。

「王妃様。この度は大変な目に遭わせてしまいましたね。私からもお詫び申し上げます」

その声は穏やかで親愛に満ちていましたが、王妃様は恐れ多くて身の震える思いがしました。

「とんでもございません。すべてはあの黒魔女の仕業。リラの精にもひどい仕打ちをしてしまい、こちらこそ女王陛下には大変な心配をおかけしてしまつたと存じます」

王妃様はまるで小娘のようにか細い声でやつとの思いで言いました。

「そうですね、リラ。あなたもずいぶんな目に遭いましたね」

「ご心配をおかけしてしまいました。申し訳ございません」

リラの精も深々と頭を下げました。

「そして、写し鏡の精。皆に倣ってベラと呼びましょうか。あなたもたいへんでしたね」

「おそれいます」

ベラも深々と頭を下げました。

「そうね、あなたの問題から片づけましょうか。

あなたも分かっているでしょうがあなたがその姿でいられるのもそう長いことはないでしょう。この国にとどまり私の力の及ぶところにいればしばらくは妖精として生き、やがて妖精として死を迎えることが出来ます。妖精の死はとても穏やかです。死した妖精の魂は自然に帰り、やがてまた別の形でこの世界に生まれ変わること

なります。

それとも、他に何か望むところがありますか？」

「おそれながら女王様」

ベラは言いました。

「私は人間に生まれ変わりたいと思います」

ベラの強い意志のこもった目を見て女王様は軽いため息をおつきになりました。

「あなたもですか。人間に長く触れていた妖精は皆そう願うようになるようですね。」

まあ、よいでしょう。

あなたの場合はその資格は十分にあるでしょう。

よろしい。あなたは人間に生まれ変わるよう私が道をつけてあげましょう」

「ありがとうございます」

とても嬉しそうなベラの横顔を鏡の精は複雑な思いで眺めました。

「女王様」

リラの精が尋ねました。

「彼女の他にも人間になることを望んだ妖精がいるのですか？」

「そうですね。何人もね」

「そして実際人間になった妖精もいるのですか？」

「いるようですよ。私が関知しているのは一人だけですけれど」

「それは、まさか？・・・」

女王様はニイツと笑ってリラの精の質問を押しとどめました。

「リラの精よ。今一度確認します。彼女は確かに時の精を目覚めさせてよいと言ったのですね？」

「はい。カラベラスは確かにそう言いました」

リラの精は探るように女王様の表情を見つめました。

「そうですね。そう言いましたか」

女王様は実に穏やかな微笑を浮かべました。

女王様は誰にもなく微笑みを向け、言いました。

「私も、出来るものならば人間に生まれ変わってみたいものですね。それでは王妃様、約束の時の精にお引き合わせいたしましょう。」  
フウツと緑の輝きが消え、無としか言いようのない闇が生まれま  
した。

それはなんと恐ろしい世界でありましょう。

闇はやがて目には見えませんが渦を巻くのが感じられ、渦は一点  
に集中して吸い込まれていきました。

辺りはまだ真っ暗でしたが、闇が消えたのが感じられました。

いえ、闇は一つの形となってそこにいました。

再び緑色が静かに輝き出すと、闇の正体が明らかとなりました。

「フー……」

闇は息をつき、辺りをぐるりと眺め回し、皆に目を向けるとニヤ  
ツと笑いました。

「私が時の精だ」

なんと、時の精とは妖精の女王様自身だったのです。

いえ、しかし、本当にそうなのでしょうか？

しーんと、水を打ったような静寂が辺りを支配しました。

鏡の精がたまらずに言いました。

「女王様が時の精だったのですか？」

「いや、違う。」

あいつと私は別人だ。命を共有しているだけだね。まったくつま  
らない真似しやがって」

時の精はどうやらベラ同様にそうとう口の悪い妖精のようです。

「それでは女王様はどうされたのです？ 消えてしまわれたのです  
か？」

「いや、入れ替わっただけさ。私が表に出てきて、今度はあいつ  
が裏に回ったのさ。さっさと出ていってしまえばいいものを、私を  
見張っているつもりなんだらう。まったく女王になったっていうの  
にこんな穴奥に引っ込みやがって。そんなに私が怖いのか？」

時の精は恐ろしい顔でクククと笑いました。

リラの精が問いました。

「あなたはカラベラスのなんなのですか？ なぜ彼女の許可で女王様はあなたを目覚めさせたのです？」

「私は何者なのかというのは、ちょっと話が長くなるね。」

私が目覚めさせられたのは、カラベラスがもう私を必要としなくなっただけだ。」

時の精はまじまじとリラの精を見つめ、遠くのものを見るように目を細めて言いました。

「リラの精。久しぶりだね。と、言ってもあなたは私のことは知らないだろうけれど。」

あなたは今回の騒動でいろいろ腑に落ちないことがあるんじゃないかい？

あなたは若い妖精の中では特に力の強い妖精のはずだ。ところがカラベラスにかかってはあなたの勘は狂いつぱなし、何もかもすべて裏目に出てとうとうイバラの化け物にまで成り下がってしまった。なぜだと思おう？」

リラの精はひどいショックに真っ青になっていました。

「私も、あなたのように彼女と何か関係があるというのですか？」  
時の精はゆったりと手を組んで椅子にくつろぎながら皆に言いました。

「あなた方も楽しみな。」

話してやろう、

カラベラスがいったい何者なのか？

リラ、あなたが何者なのか？

私が八十年前いったい何をしたのか？」

リラの精をはじめ皆息をのんで時の精の言葉に聴き入りました。ただ王妃様だけがとんでもないところに来てしまったと情けなくうつろろしていました。

時の精は笑って王妃様に言いました。

「王妃様、そう怯えなくてもいいから、十歳若返る前に私の話を」

聞きなさいな。あなたの娘も関係していることなんだから。大丈夫、女王の約束は守ってあげるから。

ベラ、あんたもね。私の話を聞けば、ひよっとしたら、人間に生まれ変わろうなんてバカな考えは変えるかもしれないからさ。

さて、始めようか。

ちよいと、長い話になるけれどもねえ………」

以下、

「眠れる森の忘れられた物語」  
に続く。

## 第4章 後始末

王妃様が帰ってきたのはあれからひと月後のことでした。

この時すでに世界は、人々がまったくそれと気付かないうちに、変わってしまいました。この十年間に王妃様に関わった全てが変わっていたのですが、その変化が大きい事柄もあれば、ほとんどなんの変化もない事柄もあり、まちまちでした。しかし人がその変化に気付くことはまったくありません。

唯一、クラリスを除いては。

クラリスだけは王妃様が帰ってくる三日前くらいから常に体が浮き上がってめまいがするような感覚を覚えていました。そして自分にはつきり覚えているのに人々の記憶から消えていき別の記憶にすり替わっていく事柄を多く発見しました。

記憶がすり替わっているわけではありません。世界が、過去が、変わっていくのです。

時の精とはなんと恐ろしい力を持った妖精だろうとクラリスは思いました。

真夜中でした。

先にリラの精が鏡を通って帰ってきて、クラリスはちゃんとその前で待っていました。

真夜中のことではありませんでしたが、それにしても帰ってきたリラの精の顔は青ざめて何かしらひどく思い悩んでいるようでした。クラリスは心配で訊きました。

「王妃様の身に何かあったの？」

「いいえ」

リラの精は何故かクラリスに怒ったように言いました。

「わたしもいつそ王妃様みたいに何もかも忘れてしまいたいわ！」  
妖精の国で何があったのでしょうか？」

しかしリラの精は自分の不機嫌の理由は話さず、

「手伝つてちょうだい」

と、七色のオーロラの揺らめく銀の鏡から王妃様の体を引っ張り出しました。

王妃様は十歳若返った姿をしていました。しかも、目を閉じて眠っていましたが、その寝顔はなんの苦悩もなく、お年以上に若々しく、まるでオーロラ姫のお姉さんのようでした。

リラの精は

「王妃様は妖精の女王様の魔法でオーロラ姫と同時に魔法の眠りについて、オーロラ姫と同時に目覚めるはずだったんだけど、寝坊をして、今日の朝、目覚めることになってるわ」

と、つじつま合わせのシナリオを説明しました。

二人は魔法で王妃様を寝室のベッドに運び、

そして翌朝目覚めた王妃様は王様やオーロラ姫と十年ぶりの嬉しい再会を果たすのです。

ですから「眠れる森の美女」の物語も最後の方の王妃様の登場は無くなってしまうました。本当の物語を知っているのはクラリスたちだけです。

終わり。

## 第4章 後始末（後書き）

第4章だけ今回書き足しました。3章の終わりに予告されている「眠れる森の忘れられた物語」ですが、「2年後くらいに書きます」と3年半ほど前に書いていまだに書いてません。書かないかなあ、もう・・・。

中途半端な物を読ませちゃってごめんなさい。でもこの後物語は「妖精大進撃！」のクラリスシリーズに続きますのでそちらを読んでやってください。

ありがとうございました。

2008.1.6(2004.5.3)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3805d/>

---

その後の眠れる森

2010年10月8日15時36分発行